



平成26年9月 第34号

発行責任者 首都圏段戸会 会長 野村親信
編集発行人 広報担当 村木央明

ご挨拶

首都圏段戸会会長 野村親信 (高16回)



最近新聞紙上等で最も頻繁に見られる我が国が抱える問題は少子高齢化問題ではないでしょうか？現在一億二七〇〇万人の我が国総人口は既に長期の減少過程に入り、このまま行くと二〇五〇年には九七〇〇万人となり二一〇〇年には五〇〇〇万人を切るという深刻な予想が出ています。

じ、世界に羽ばたくチャレンジ精神を持つた生徒を育てるといふ計画であります。岡崎高校は、社会に貢献する有為な人材を育成するといふ高邁なる教育方針のもと、「学習」「部活動」「行事」の三本柱の徹底を掲げ着実に大きな成果を上げています。そして、従来の「文武両道」「質実剛健」の資質に加え「グローバルなチャレンジ精神」を兼ね備えた人間を育てることは将に時代のニーズに応えるものであると考えます。

人口が減少すれば必然的に国内市場は縮小して行くので、これまで海外進出に積極的ではなかった企業も海外に目を向けざるを得なくなってきました。こうして今後ますますグローバル化が進んで行く時代に、企業(=社会)が求めるのは国際化に対応できる人材であります。

我等が母校岡崎高校は、この様な時代の要請に応えるべく「世界に開かれ、世界にチャレンジする岡高」を目指し、従来からの英語教育に加え昨年から新たな活動を始めたというニュースが入ってきました。

具体的には、SSH事業の一環としての米国研修、PTA国際交流事業としての英国研修を始め様々な国際的活動を通

近年岡崎高校の毎年の卒業生約三六〇名のうち約一〇〇名が首都圏の大学に進学してきます。それにつれて首都圏段戸会の規模も年々大きくなっていく一方、会員の皆さんが会員同士の交流の輪を広げ様々な分野で活躍されていることを大変頼もしく嬉しく思っております。

今年も、同期の仲間との旧交を温め、先輩・後輩諸氏との新しい交友関係を築き、恩師の方との懐かしい再会を果たすことのできる総会・懇親会に是非お出かけください。

平成26年度世話人

- (高2回)服部 登 鼎
(高3回)丹羽 弘 政
(高6回)有馬 嘉 久
(高7回)是津 嘉 厚
(高8回)杉浦 中 敏
(高9回)岡田 厚 敏
(高10回)山川 肇 爾
(高11回)永田 宏 淳
(高12回)鶴田 文 男
(高13回)中 浩 之
(高14回)磯尾 鏡 子
(高15回)神谷 国 広
(高16回)満江 信 之
(高16回)鈴野 弘 親
(高16回)鈴野 親 昭

- (高17回)伊与田正彦
(高17回)佐伯寛子
(高18回)山田博子
(高18回)伊藤博邦
(高18回)音部昌宏
(高19回)山内正行
(高19回)都築正透
(高20回)福山央明
(高20回)野村隆太郎
(高21回)天野貴典
(高21回)辻村恵子
(高21回)小栗俊文
(高22回)山田洋子
(高22回)野田浩三
(高25回)戸田譲三
(高26回)織田利彦
(高27回)長田光雄
(高28回)酒井邦彦
(高30回)米津智徳
(高31回)高原正之
(高33回)野村明

- (高34回)板谷敏正
(高34回)井上由美子
(高35回)岡田敦嗣
(高38回)菅伸介
(高38回)内田力幸
(高40回)中西和武
(高41回)大山健二
(高42回)平山麻子
(高43回)長野益之
(高44回)八田直樹
(高45回)松尾貴之
(高45回)筒井瑞之
(高46回)西浦大輔
(高46回)朝岡博博
(高47回)小椋俊博
(高47回)杉本いづみ
(高48回)藤井晋也
(高50回)藤居福代
(高52回)鳥居貴雅
(高52回)今泉雄太
(高52回)清水佳子

- (高53回)小野靖王
(高53回)石井貴大
(高53回)辻内直子
(高54回)安藤康伸
(高54回)丸藤尚博
(高54回)加藤直也
(高57回)川口晃正
(高57回)山岡敦子
(高58回)石川航己
(高58回)鈴木穂子
(高60回)篠原国智
(高60回)杉浦綾香
(高61回)吉村圭吾
(高61回)辻翔太
(高61回)新見由佳
(高62回)大山なつみ
(高62回)栗津文香
(高64回)藤岡進也
(高64回)細井美裕
(高65回)村松 旺

段戸サークルのお問合せ先

皆さまの参加をお待ちしています！

- “段戸囲碁会” (代表：藤田 訓弘 高13回) kfujita@muc.biglobe.ne.jp
“段戸音楽会” (代表：山田 博子 高17回) marcialegow2w-hyyamayama@memoad.jp
“段戸句会” (代表：小森 蓑子 高13回) shigeiko_komori@ybb.ne.jp

- “段戸山の会” (代表：板谷 敏正 高34回) itaya@propertydbk.com
“段戸ゴルフ会” (代表：木村富司雄 高10回) BYR10566@nifty.ne.jp

「首都圏段戸会」は愛知県立岡崎高等学校の首都圏同窓会です。

公式ホームページ (H25年に変更しました) http://dandokai.o.oo7.jp/

首都圏段戸会 検索

パソコンやスマートフォンが得意な方も、お子さんやお孫さんに操作を頼んで、一度ホームページを訪ねて下さい。

人生お楽しみ中！

72歳の気力ー広島を走る

高12回 神谷 信行

高校時代、柔道部での練習で持久力が付いたのかもしれない。大学院卒業後は大学の教員として、リタイヤ後もKMRラボで電気化学の研究を続けている。運動とは無縁の環境だから、体を動かさないと胃の調子が悪くなり、週末はよく走っている。

平成元年の記念に日本橋から京都三条大橋まで「走って小さな旅」をしようと考えた。この小さな旅はリレーマラソンで旅をするもので、東海道往復、中山道、甲州街道、日光街道、水戸街道など日本橋起点の街道を8年かけて走った。その後、山陽道を走り始めたが、大阪、姫路、岡山と横浜から遠くなると、1日40km走ったとしてもなかなか距離を稼ぐことはできず、竹原でストップしたままになっていった。それなら2日続けて走ってしまおう。フルマラソンを2日続けて走ったことはないの、大きな挑戦であった。

昨年11月、夜行バスで広島へ行き、土日で竹原から広島まで70kmを走った。考えるだけでも気力のいることで、「72歳の気力」だと喉につかえていたものが一挙に抜けたうれしさを冊子にまで書いた。今年の4月には、広島から徳山、防府



徳山駅にて

一回の走行(90km)で下関へたどり着く。実に26年を掛けた大仕事が終わろうとしている。

徳山駅では徳山出身の元秘書さんが東京から駆け付けて、徳山到着を祝ってくれた。マラソンの優勝者が被る月桂樹の冠を用意してくれた。徳山駅の駅長さんは横断幕まで作って出迎えてくれた。この時の写真は「日刊新周南」4月23日の一面を飾った。

今回の旅には裏話がある。昨年ちょっとのことでフルのエントリーを逃し、80歳まで続けるぞ、が途切れてしまった。それなら広島を走れば十分と小さな旅が再開し、2回の走行で160kmを走ってしまった。静岡のマラソンを走っていたら、広島まで出かけなかったかもしれない。人生、予定通りにはなかなかいかないが、意外な方向に展開するものである。その時々のお会いを大切にしたいものだと思う。(詳細はKMRラボのホームページに <http://www.km-lab.co.jp/>)

まで90kmを3日かけて走ることができた。日本橋から1000kmにもなる。山陽道もあと

山に導かれて

高21回 内山田 邦夫

役所時代は自由が利かず、登山は「封印」していた。

退官が決まったら、学生時代の登山部の畏友S君が、早速「内山田君の退官を祝う会」を呼びかけ同期や後輩を動員してくれた。「これは、山に帰って来いという意味だな」と思った。以来、猛烈なジム通いを開始し、自主トレとしての中山行、六甲山・外秩父の40km超のトレイルなどで地力をつけ、1年で念願の冬山にも復帰出来た。山へのアクセスは、自転車にテント等を満載したこともあったが、自転車はハタ迷惑。そこで一念発起し、還暦直前にバイクの免許を取得した。今はこれがメイソンの足になっている。

3年ほど前、中高年の登山サークルの責任者を引き受けた。このため、単独行登山との時間のやり繰りに苦労している。昨年8月には、9日間の予定で南アルプス全縦走にトライし、心身ともにシビレた(単独・テント。ヒョウマジりの豪雨に捕まり7日目に下山)。ホームグラウンドの秩父山地には、思い入れが強い。秩父の山57座(日本山岳会選)を完登したほか、秩父34札所めぐり、秩父学検定上級、東大秩父演習林ボランテア、溪流釣りなど、いろんな



木曾駒ヶ岳と宝剣岳の分岐にて (筆者は中央)

切り口で秩父に接し続けている。とりわけ樹木や生態系、地質などは興味が尽きない。将来、登山が出来なくなったら、秩父通いとフルトと絵に活路を見出すつもりだ。

日本百名山はあまり執着はないが、それでも今年中には完成させ区切りをつける。心は既にシベリアや中央アジアに向かっている。かつてソ連に駐在した当時、西シルクロードや冬のシベリアは経験している。今度は出来たらバイクで漫遊したいところ。現在、露語・英語の情報収集にいそしんでいるが、果たして実現可能かどうか……?

わたしのいた頃の岡高

春の選抜高校野球大会出場

高7回 是津 定利

一九五四年（昭和29年）岡崎高校野球部は甲子園で行われた戦後第7回（通算第26回）選抜高校野球大会に出場した。5年ぶり2回目のことであった。その後今日に至るまで出場はない。あれからちょうど60年。当時は、商業科があった（2クラス）という事情はあるが、今思えばビッグな出来事であった。われわれ7回生が3年生のときのことである。

4月1日大会初日の第2試合、相手は鳴門高であった。応援団の必死の声援も届かず残念ながら0対4で敗れた。

選抜大会出場の決定後、生徒会が中心となって応援団を立ち上げた。応援のことは何もわからず、先輩に教えを乞うた。生徒会の役員が応援のリーダーとなって三々七拍子などの練習をした。太鼓や羽織、袴を借りてきた。当時は市電が走っており、康生駅頭で市民へのPRを兼ねて募金活動をした。東岡崎駅前の商店街を訪ねて協賛をお願いしたこともあった。

当時、新幹線はなく、東海道線はまだ電化されていなかった。選手達は国鉄岡崎駅から「汽車」に乗って出発した。浜本校長も出席され、駅前で壮行会を行った。応援団の主要メンバー10数名は試合の前日に出発し、宝塚市のお寺（中山寺）の本堂で宿泊した。米は配給制の時代で、勝ち進むことを期待して各自一週間の米を持参した。岡高はエース投手の杉浦君、中堅手兼リリーフ投手の強打者河合君を中心とする強豪チームであった。

秋の県大会、東海大会で、いずれも中京商業と優勝戦を戦った。優勝が期待されていたが接戦の末惜しくも敗れた。準優勝ではあったが憧れの甲子園切符を手に入れた。試合当日の朝、岡崎から汽車で馳せ参じた生徒達、貸切りバスで乗り込んだ父兄やOBを合わせて二百人を超える応援団となった。岡高の前評判は高く、優勝候補の一角に上がっていた。しかし、甲子園の独特の雰囲気呑まれたか実力を発揮できず、無念の初戦敗退となってしまった。敗戦校は通常甲子園の士を持ち帰るが、選手達は夏の大会に来るとの熱い思いから、持ち帰ることを止めた。

試合の前、生徒会として激励電報を手宿舎に送った。「鳴門なんぞはなんのその」。後日、部長の筒山先生が私の家（明大寺町）に来られ、先生から応援と電報に対する礼の言葉をいただいた。



第7回選抜高校野球大会

杉浦、河合両君は毎日オリオンズ（現千葉ロッテマリーンズ）にスカウトされた。この手記を書くに当たり同期生の協力を得た。

浦島リポート

岡崎に定住して解ったこと

高16回 門野 史明



5年前にシクタンクを退職し岡崎に帰りました。東京と海外の勤務が多かったため、定住するのは中学・高校以来のことになりました。これまでも実家には頻繁に帰っていましたが、岡崎の外観的な変化も大

概は承知しておりました。その意味では浦島太郎的なショックは殆どなかったわけです。しかしながら、今まで知識としては十分承知をしていながら、東京のような例外的に活気のあるエリアで仕事をしているとリアルには感じられなかった現象のいくつかが、地域の中規模都市にどっぷりと漬かって暮らすようになって身に沁みて解るようになりました。内的な浦島現象とでも言うのでしょうか。

事例をあげてみますと、先ずは中心市街地の空洞化です。この現象は我が国の中都市において普遍的に見られるものですが、わが岡崎市のケースもなかなか壮絶です。康生通りを中心としたかつての繁華街はシャッター街と化し、暗くなれば人影も減多に見られません。二つあったデパートもマンションに建て替えられ

ました。似たような現象は東岡崎駅前の通りにも見られます。それではどこか新たに中心街が形成されたでしょうか？残念ながらタウンという意味での中心は見当たりません。人の集まる場所は機能別に点として発生しています。ショッピングではイオンをはじめとするいくつかの商業コンプレックス。文化・教養分野ではリブラ（図書館）やコロンネット（コンサートホールなど）、医療では山の上に移転した市民病院や南部の針崎地区に新設された公衆衛生センター、スポーツでは山を切り開いてできた中央総合公園などです。このような機能別に中心点が分散することの背景にあるのはジャンル別ニーズの高度化・多様化と超のつくモータリゼーションの進展でしょう。

次なる事例は少子高齢化です。私の住んでいる竜美ヶ丘は岡崎高校の南の斜面に広がる丘陵地で私の高校時代は一面の雑木林でした。岡崎では比較的新しい住宅地なので意外に思われるかもしれませんが、目下少子高齢化が急速に進んでおります。私は迂闊にも町内の総代の任についてしまい多忙を極めておりますが、全ての行事は年寄りが中心にならざるを得ません。今のところは強健な方が多いため無事回っているのですが、新陳代謝の乏しい町ですので、毎年確実に一歳高齢化が進みます。これからどうなるのか暗澹とせざるをえません。また小学生の減少には呆然とするばかりです。もう町内のことも会ではソフトボールのチームも編成できず、秋祭りの子供神輿も担ぎ手不足で風前の灯です。

以上述べた変化は構造的なものです。これらから目をそむけることなく、前提としてこれからの岡崎の町づくりは進めざるを得ないでしょう。

なぜこの仕事を? — 証券業の巻

高57回 小田亜矢子

なぜこの仕事を?と問われた時に、正直、ものすごく悩みました。父も母も岡崎高校出身であり、父は建築士、母は教師という家庭で育った私が、なぜ今、ヘッジ・ファンドに関わる仕事をしているのか。それは、偶然であり、人とのご縁に恵まれながら、選択の連続で行きついた結果であると感じていきます。

今振り返って考えてみると、大学二年時にゼミ試験で提出したレポートは、当時話題になっていた世界食糧危機を研究したものでした。先物市場への金融投機から原油、小麦、大豆といったコモディティ価格の高騰を招いたと結論づけています。さらに大学二年時には、リーマン・ショックが起きます。株価大暴落、世界同時不況といった言葉が世間を賑わし、世界金融危機を目の当たりにしました。私が大学生であった当時に、世界経済がマーケットに翻弄され、それに興味を持ったことは偶然であったと思います。

また人とのご縁に恵まれていると深く感じます。国際経済学ゼミに所属していたこともあり、多くの先輩方が金融業界で活躍されていました。その中でも、証券業界に勤務されている女性の先輩とお話させて頂く機会があり、彼女の凛とした働き方を見て、単純に女性として強い憧れを抱きました。また新入社員として最初に配属された株式部の先輩からは、証券らしく、怒鳴られ厳しく育ててもらい、社会人としての基礎を学ばせて頂きました。その後、ひよんな出会いがき

かけて、現在の会社に転職し、今はヘッジ・ファンドに携わる仕事をしています。全てが想像していたよりも早いペースで進み、常に失敗と挫折の連続であり、仕事は楽です、とはとても言えません。激しい荒波に揉まれながらも、日々学習できると感じます。

私が証券会社を選んだのは偶然であり、人との素晴らしい出会いがあったからであると思いますが、常に心得ていることが一つあります。多岐に渡る選択肢の中で、残念ながら一つしか選べないのが人生です。大学の進路選択も同じことが言えると思います。あらゆる選択肢と可能性を考え、何を選ぶか、どこへ進むべきか、その時にかげられる限りの時間をかけて、とことん悩むべきであると思います。人生の節目、節目で悩み、人生を判断しなくてはいけない辛さがあります。まだまだ何も成し遂げれていない私の社会人人生ですが、一度決断したら、後ろは振り返らず、とことん喰らいつつ、前を向くのみだと思っています。



食べ物の「もったいない」話

長野 麻子 (高42回)



ができることがたくさんあると考えています。全ての加工食品には、一部の食品を除き、賞味期限又は消費期限のどちらかの期限が表示されています。消費期限を過ぎたら食べない方がよいですが、賞味期限はおいしく食べることでできる期限なので、これを過ぎてもすぐに食べられなくなるわけではないことを理解して、むやみに捨てず、見た目や匂いなどの五感で個別に食べられるかどうか判断することが大切です。また、買い物に行く前に冷蔵庫の中にある食材の種類や量を確認し、日頃から賞味期限を点検・把握するなど、家にある食品の在庫管理に努めましょう。定期的に冷蔵庫をクリーンアップするのも効果的です。食材を使い切る、食べきれなかったものを他の料理に作りかえるなど、

ネルギーなどの資源を使っていますので、食べずに捨てることは貴重な限りある資源を無駄にすることも言えます。

2050年には世界の人口は90億人を超えると予想されており、この食べ物の無駄をなくしていくことが世界的な課題とされています。

日本には昔から「もったいない」という外国語に訳せない素敵な言葉があります。食品ロスを減らすためには、「もったいない」を意識して、食事や買い物、日々の生活の中で一人ひとり

調理方法や献立の工夫も腕の見せ所です。レストランでは食べられる量を注文して食べきる、宴会の幹事になったら食べ切りの声かけをする、スーパーでは棚の前の商品から買うことが食品ロスを減らすことにつながります。「もったいない」発祥の国として、できることから小さな取組を積み重ねていくことで、皆でこの社会的な課題を解決していければと思います。

(農林水産省食品産業環境対策室長)

段戸音楽会ミニコンサートのご報告

高48回 羽佐田 泰弘 高58回 石川 航己

2014年3月21日、渋谷の小さな音楽スタジオにて、段戸音楽会ミニコンサートを開催しました。昨年に引き続き、2回目の開催となりましたが、今回も満員御礼の嬉しい悲鳴、ありがたい限りです。野村会長はじめ多くの段戸会会員ならびにそのご家族の方々にかけつけて頂き、段戸会の大御所から、現役大学生、会員のお子さんまで、様々な年代の方が集まる音楽会となりました。

トップバッターとして、段戸音楽会の若手有志で結成した「岡高バンド」がビートルズ、財津和夫、椎名林檎等の得意の楽曲を演奏し、威勢良くミニコンサートが開会しました。それに続いて、尺八演奏、バンジョー演奏、フルート演奏、ギター弾き語り、毎年総会でも演奏している段戸音楽会で馴染みの深い面々が、この日の為に密かに練習を重ねて来た曲の数々を披露し、音楽会を盛り上げました。それらの好演に触発され、最初は演奏を聴くだけのつもりで来場した方々も、ステージへ飛び入り参加。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の朗読とピアノのアドリブセッション、会場で意気投合した合唱部OBによる“ベートーベン「第九」より歓喜の歌”など、予定外のプログラムもありました。当日偶然居合わせた者同士、ふとした流れですぐに打ち解けて、一緒に演奏ができてしまうというのは、岡崎高校同窓会である段戸会の魅力だと思います。ミニコンサートの最後には、総会で演奏した曲を再度披露。野村会長指揮による復興テーマソング「花は咲く」の演奏と当日会場にいらした方全員での岡崎高校校歌斉唱で

締めくくりました。特に校歌斉唱では、会場にいた誰もが、岡高生の心に戻っていたことと思います。このような次第で、参加者全員の笑顔と共に段戸音楽会ミニコンサートを閉会しました。

段戸音楽会は、クラシックやジャズ、フォークから邦楽まで多種多様な音楽に取り組んできた様々な才能を持つ人が集まっています。そんな多彩な人たちが集まって、知恵と工夫を出し合い、ジャンルの壁を越えて一つの音楽をかたちにしていくところが、他の楽団やバンドにはない段戸音楽会ならではの面白さだと思います。次回の総会やミニコンサートでも沢山の方々と出会えることを楽しみにしています。



首都圏段戸会ホームページの“ちょこっとガイド”

トップページ
段戸フォーラム
段戸サークル
会員のエッセイ
がんばっています
会員の出版物
写真集
掲示板
同期の広場
リンク
故郷の名産品
首都圏段戸会情報
会員登録・変更
お問い合わせ

首都圏岡崎高校同窓会
首都圏段戸会
トップページ

[運営協力金のお願い](#) [過去のトップページ記事](#)
[首都圏段戸会会報](#) [役員・世話人名簿](#)

首都圏段戸会ホームページは、平成15年（2003年）9月に福山透さん（高19回）が中心となって、全体のデザイン、構成などを一つ一つ手作りにして、始められたものです。

当時、会報は年1回発行でしたので会員への最新情報の提供、それと首都圏段戸会の諸活動、会員個人の活躍ぶりなどを紹介する「会員が交流する場」の提供を狙って作られました。その後11年を経て、今ではこれまでの情報を蓄積した情報倉庫の役割も果たしています。ホームページは、現在7名の情報担当の方（P1の「平成26年世話人」参照）が、日々の忙しい仕事の合間をぬって更新作業を、それも皆さんのボランティアで、進めています。

以前、会報第23号（平成21年）で説明しましたが、今回はその後の変化も含め、その一部を紹介します。

- **会員の出版物**：色々なジャンルの出版物が紹介されています。新しく本・写真集などを出された会員の方は、「お問い合わせ」からご連絡下さい。
- **写真集**：何と言っても総会・懇親会の写真です。第29回（平成13年）から懐かしい写真が一杯です。それと、福山さんが学会等で各国を訪問した際に撮った写真も、居ながらにして海外旅行をした気分になれると、静かな人気です。
- **お問い合わせ**：首都圏段戸会について「よろず相談」を受け付けています。また、ホームページに掲載を希望される場合も、こちらから依頼できます。
- **バナー広告**：会員在籍企業等からのバナー広告を募集しています。掲載を希望される方は「お問い合わせ」からご連絡下さい。

スターツコーポレーション(株)
代表取締役副会長
関戸博高(高20)

税理士法人
みらいパートナーズ
税理士法人みらいパートナーズ
戸田誠三(高25)
(段戸会会員のみ相談無料)

TANABE & PARTNER
田辺総合法律事務所
パートナー弁護士
中西和幸(高38)

岡崎信用金庫
おかしんインターネット支店
岡崎信用金庫

第42回首都圏段戸会総会・懇親会のご案内

●日 時 平成26年10月25日（土）13：00～17：00

●場 所 アルカディア市ヶ谷（私学会館）（右地図参照）
千代田区九段下北4-2-25（TEL 03-3261-9921）
JR市ヶ谷駅から徒歩2分
地下鉄市ヶ谷駅（有楽町線、南北線、新宿線）
から徒歩2分



●講演会 タイトル：文化庁芸術祭優秀賞受賞

テレビ未来遺産ドラマ特別企画

「こうのとりのゆりかご～『赤ちゃんポスト』の6年間と救われた92の命の未来」
で伝えたいこと

講師：杉浦美奈子氏（高35回） TBSテレビ 編成考査局審査部長

「赤ちゃんポスト」の開設から現在までの実話をもとに制作され、平成25年11月に放映されたこのドラマは、見過ごされがちな命の尊さ、生きることの大切さを気付かせてくれた本格的な作品として高い評価を受けるとともに、テレビドラマだからこそ描ける領域があることを改めて教えてくれた力作であるとして、この年の文化庁芸術祭優秀賞を受賞されました。この作品のプロデューサーを務めた杉浦美奈子さんに“ドラマを通じて伝えなかったこと”を、放送業界での活躍振りも交えながら、ご講演頂きます。

（略歴）

慶応義塾大学文学部卒。昭和62年当時の東京放送（TBS）に入社。朝の情報番組のアシスタントディレクター、ディレクターを経て報道局社会部へ。筑紫哲也ニュース23、警視庁記者クラブ、都庁記者クラブを担当。

第一子出産を機に、放送基準を管轄する審査部へ。放送倫理・放送表現に関する社内教育、危機対応などを担当。並行して教育研修部、お客さまインターアクセス・プロジェクトの立ち上げ、赤坂サカス立ち上げ時の視聴者参加型イベントを担当。平成20年8月ドラマ制作部に異動。平成26年4月から審査部長。

●会 費 男性 8,000円 女性 6,000円

ただし、以下の会員には特別割引があります。

古稀を過ぎた会員（高14回以前）	5,000円
若手会員（高52回以降）	5,000円
学生会員（高52回以降の大学、大学院、専門学校等）	1,000円

●ご招待 古稀年次（高15回）の方は、ご招待申し上げます。（会費無料）

●招聘恩師（予定：敬称略）

山田(水沢) 澄江（保健体育） 生田 省三（英語）
室(杉浦) 庸子（家庭）

運営協力金のお願い

首都圏段戸会会長 野村親信 (高16回)

平素は首都圏段戸会の活動にご理解、ご協力いただき、まことにありがとうございます。

首都圏段戸会では1972年、第1回総会が開催されて以来、回を重ね、今年で42回目を迎えることになりました。当時、数十名程であった出席者も、最近では200名を超える状態が続き、前回は230名程の方に参加を頂いております。これもひとえに会員の皆様のご支援の賜物と、心より感謝しております。

首都圏段戸会の特徴は、岡崎高校の長い歴史を活かし、首都圏在住の大学生、社会人、さらに定年退職された方々が一体となって、上記総会のほか、イベント、サークルなど、さまざまな活動を行っている点であります。たとえば、現役の岡高生を対象とした「オープンキャンパス」は若手会員である大学生が主体となって運営し、大学、研究室の見学とともに、懇親会を通じ、進路相談の一助の役目を果たしております。また、生活、文化、政治、経済などの分野で目覚ましい活動をされている会員の方を講師として招く「段戸フォーラム」、さらに、俳句、囲碁、山登り、音楽といった分野で、幅広い年次の同好の会員による「段戸サークル」があります。いずれも若手会員と先輩が交流を深められる場として提供されたものです。こうした活動は、春と秋の年2回、「首都圏段戸会会報」を通じて会員の皆様方にお伝えするとともに、タイムリーな情報提供のために「首都圏段戸会ホームページ」も開設しており、会員同士でさまざまな情報交換も行われております。

上述の諸活動の基盤は、会員の皆様から頂戴している「運営協力金」のご支援と各卒業年次から集まった80名余で構成される世話人の方々による「ボランティア活動」によって支えられています。

このように、首都圏段戸会は会員の皆様のご支援、ご協力に支えられ、人間的な手作りの感触を大切にしながら、運営されている同窓会です。つきましては、首都圏段戸会の諸活動を益々充実したものするためにも、これまで以上に幅広く、多くの会員の皆様から運営協力金のご支援を賜りたいと思います。宜しくお願いいたします。

〔運営協力金の主な用途〕

1. 会報の印刷・郵送費用

会報は年2回（春号・秋号）発行し、1,600部余を会員向けに、500部を岡崎高校（学生、先生方、同窓会幹部）に送っています。会報の印刷費用と郵便費用に運営協力金の3/4強を充当しています。

2. 世話人会費用

世話人会は、世話人が年に4～5回集まって、総会・懇親会の諸準備・総会当日の進め方、会の諸活動の進め方について相談をしています。会場代、夕食費用に運営協力金の1割弱を充当しています。

3. 雑費

ホームページのサーバー使用料・作成ソフトの費用、現役岡高生を対象にしたオープンキャンパスの費用、総会・懇親会の出欠返信の郵便費用などに運営協力金の1割強を充当しています。

〔最近の運営協力金の推移〕

	<金額>	<協力者数>
平成23年	1,488,600円	419
平成24年	1,402,220円	406
平成25年1月1日～平成26年2月11日（第41回総会・懇親会開催日）	1,291,400円	390

2013年から2014年2月総会までの運営協力金支払者

(賛助法人)	スターツコーポレーション株式会社 株式会社文化工房 田辺総合法律事務所 税理士法人みらいパートナーズ	近藤 祥子 藤浦 満智 近藤 立堤 立堤 鶴成 新井 康夫 森田 一敏 柴田 道一 神杉 秋洋 鈴木 昭二 田中 直也 中原 山直 藤原 訓宏 真山 美智 阿部 完子 磯尾 秀進 岩垂 元一 笠原 瀬雄 中島 武夫 古澤 官誉 雨宮 守一 後藤 慎川 長坂 朋信 満江 康子 大鈴木 親信 丸山 和紀 早稲田 嘉代 伊与 田正 小林 乙寛 佐伯 榮幸 竹尾 美智 中山 博子 新井 正成 高橋 内直 石木 武陽 木下 藤正 近関 都則 福村 隆太 天野 昇 遠藤 俊典 坂本 貴郎 辻村 淑純 原野 哲 吉原 立美 足渥 美一	子登江治文子之雄雄一浩 良幸俊純弘龍章嘉山 藤田藤庄木谷辺々 内兵山近新鈴長渡野 澤徳内門子孝治る仁広嗣生徳子彦夫康惠平枝三彦人雄健み淳之博二子香り広子子敦傑誠二宏大幸力実武里之郎博みづ奈菜周泰弘雄直心尚怜英麻航綾	(高13回)	岩間 博 成田 重忠 鷗野 庄二郎 神谷 和郎 木村 武義 村松 義三 志賀 治学 山本 治雄 青山 敦夫 今井 敏夫 杉浦 嘉次郎 名城 政次 三阿部 恭道 伊藤 芳枝 小澤 一郎 加藤 正義 木村 博代 後藤 千健 左右 洋一 高井 鼎次 丹羽 英次 平井 玖枝 柳澤 子 金田 二子 成瀬 郁子 杉野 清夫 平野 福明 小杉 山和 青山 藤子 加藤 衛修 近藤 里恵 杉橋 谷允 高羽 井豊 三内 田節 工藤 圭道 高外 村仁 岡島 敏夫 岡金 井時 香高 木治 安藤 哲美 宇佐 史興 小栗 野靖 笹野 成富 藤本 目肇 山本 馨 高木 か 青林 紀四 石村 初彦 幸田 隅根 中根 美穂 藤水 野夫 室垣 早苗 稲橋 大倉	(高14回)	川野 恵照 石川 耕春 志賀 田弘 市川 龍夫 荻野 康史 小野 好道 久保 木清 高井 美次 高須 賀芳 松井 淳子 柴崎 美津子	(高15回)	浦田 正健 前志 純子 市川 平毅 小斎 廣治 是富 悦定 吹向 昌敬 小野 勝巳 杉浦 嘉厚 内山 藤生 藤本 朝忠 片野 英司 高小 孝充 安藤 登朗 太田 信司 村富 博子 杉浦 哲子 藤原 鮎子 安山 敦敏 山本 眞司 阿部 泰子 梅村 子夫 清水 豊夫 服部 豊成 本村 正雄 山崎 宣典 岩月 一則 菅野 孝子	(高16回)	浦田 正健 前志 純子 市川 平毅 小斎 廣治 是富 悦定 吹向 昌敬 小野 勝巳 杉浦 嘉厚 内山 藤生 藤本 朝忠 片野 英司 高小 孝充 安藤 登朗 太田 信司 村富 博子 杉浦 哲子 藤原 鮎子 安山 敦敏 山本 眞司 阿部 泰子 梅村 子夫 清水 豊夫 服部 豊成 本村 正雄 山崎 宣典 岩月 一則 菅野 孝子	(高17回)	浦田 正健 前志 純子 市川 平毅 小斎 廣治 是富 悦定 吹向 昌敬 小野 勝巳 杉浦 嘉厚 内山 藤生 藤本 朝忠 片野 英司 高小 孝充 安藤 登朗 太田 信司 村富 博子 杉浦 哲子 藤原 鮎子 安山 敦敏 山本 眞司 阿部 泰子 梅村 子夫 清水 豊夫 服部 豊成 本村 正雄 山崎 宣典 岩月 一則 菅野 孝子	(高18回)	浦田 正健 前志 純子 市川 平毅 小斎 廣治 是富 悦定 吹向 昌敬 小野 勝巳 杉浦 嘉厚 内山 藤生 藤本 朝忠 片野 英司 高小 孝充 安藤 登朗 太田 信司 村富 博子 杉浦 哲子 藤原 鮎子 安山 敦敏 山本 眞司 阿部 泰子 梅村 子夫 清水 豊夫 服部 豊成 本村 正雄 山崎 宣典 岩月 一則 菅野 孝子	(高19回)	浦田 正健 前志 純子 市川 平毅 小斎 廣治 是富 悦定 吹向 昌敬 小野 勝巳 杉浦 嘉厚 内山 藤生 藤本 朝忠 片野 英司 高小 孝充 安藤 登朗 太田 信司 村富 博子 杉浦 哲子 藤原 鮎子 安山 敦敏 山本 眞司 阿部 泰子 梅村 子夫 清水 豊夫 服部 豊成 本村 正雄 山崎 宣典 岩月 一則 菅野 孝子	(高20回)	浦田 正健 前志 純子 市川 平毅 小斎 廣治 是富 悦定 吹向 昌敬 小野 勝巳 杉浦 嘉厚 内山 藤生 藤本 朝忠 片野 英司 高小 孝充 安藤 登朗 太田 信司 村富 博子 杉浦 哲子 藤原 鮎子 安山 敦敏 山本 眞司 阿部 泰子 梅村 子夫 清水 豊夫 服部 豊成 本村 正雄 山崎 宣典 岩月 一則 菅野 孝子	(高21回)	浦田 正健 前志 純子 市川 平毅 小斎 廣治 是富 悦定 吹向 昌敬 小野 勝巳 杉浦 嘉厚 内山 藤生 藤本 朝忠 片野 英司 高小 孝充 安藤 登朗 太田 信司 村富 博子 杉浦 哲子 藤原 鮎子 安山 敦敏 山本 眞司 阿部 泰子 梅村 子夫 清水 豊夫 服部 豊成 本村 正雄 山崎 宣典 岩月 一則 菅野 孝子	(高22回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高23回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高24回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高25回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高26回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高27回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高28回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高29回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高30回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高31回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高32回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高33回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高34回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高35回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高36回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高37回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高38回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高40回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高41回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高42回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高44回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高45回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高46回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高47回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高48回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高49回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高50回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高52回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高53回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高54回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高55回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高56回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高57回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高58回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子	(高60回)	宏喜 弘彦 尚雅 昭之 藤田 健二 中田 德仁 藤原 一允 渡辺 正紀 柴田 治吾 野重 正鎮 美野 彰道 多美 輝澄 森美 江澄 野村 幸子 磯村 英子 太田 紀子 佐野 征公 鶴田 瑞川 長谷 智隆 木村 弘里 鈴木 昭雅 牧野 邊雅 伊藤 泰康 大近 藤啓 鈴德 哲夫 中武 隆子
--------	---	--	---	--------	--	--------	--	--------	---	--------	---	--------	---	--------	---	--------	---	--------	---	--------	---	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--	--------	--